

入選

金色の龍

徳島県 津田小学校 6年 林 創太

僕は、毎年5月がくると思い出す人がいます。3才年上の直樹君です。僕が小学校3年生でバスケットボールを始めたとき、僕より少し前に入部したのが直樹君でした。僕たちは、学年は違うけど入部したてで、いっしょに練習するうちに、仲良くなりました。

その年の5月、直樹君がバスケの練習後に、

「これあげる、金色の龍。」

と言って、僕に小さな箱を渡そうとしました。前の日に直樹君たち6年生は修学旅行から帰ってきたので、おみやげだとすぐわかりました。でも、ぼくはなぜ直樹君が僕だけにおみやげをくれるのか、わかりませんでした。ほかのメンバーはもらっていないのに、僕だけもらうのは何か変な気持ちになって、とっさに、「いらない。」と言ってしまったのです。

僕は言い直そうとしましたが、こわくて声が出ませんでした。直樹君の顔を見ると困っていて、その顔を今でも思い出します。そのひとことでどれだけ直樹君が傷ついたか、考えても後の祭りです。

その後、おみやげの話は言い出せないまま、直樹君は小学校卒業と同時にバスケはやめてしまい、3年間会ったことはありません。

そして、今年は僕が6年生になり、自分が修学旅行でいろんな場所に行って、予想以上に自由時間がなく、おこづかいもすぐなくなることがわかりました。それなのに直樹君は3年前、僕におみやげを選んでくれた。その彼の親切を拒んでしまったのだと思うと、楽しいはずの修学旅行なのに、おみやげを見るたび責められている気がしました。

京都で、なんとあのときの「金色の龍」を見つけたとき、少しためらいましたが、僕は「金色の龍」を買わずにいらませんでした。3年間ずっと金色の龍が頭から離れず、本当は探していたのです。

このあいだ、バスケ部の後輩が名前が入ったキーホルダーを作ってきてくれました。ぼくは、

「ありがとう。きれいな色だしカッコいい。」

と言ってすぐにカバンにつけました。でも、ほかのメンバーは、いやそうな顔をして、

「何これ、ださい、いらんわ。」

と言って、せっかくの手作りのキーホルダーをもらわなかったのです。

僕は、3年前の記憶がよみがえり、一生けん命作った思いが痛いほどわかるので、せっかくだからもらうように言うと、その子も、ぱっと笑顔になりました。僕は誰かの親切を絶対に無駄にすることはできないことを、僕は家や学校やバスケットを通して学んでいます。人からいただいたものを喜んで受け取ることも、小さな小さな親切だと今は思うからです。

なぜなら、僕の家には金色の龍が二つあるからです。実は二つ買って、もう一つは弟にあげました。弟が飛び上がって喜んでくれたとき、誰かに物をあげてその人が喜んでくれたら、自分もうれしいということに気づいたのです。弟も6年生になったら、僕におみやげを買ってきてくれるらしいです。小さな小さな親切がつながっていくのは、いいなあと思いました。